

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業
分担研究報告書

アトピー性皮膚炎診療ガイドライン：シャワー浴に関するクリニカルクエスチョンに対する推奨文の作成

研究代表者 加藤則人 京都府立医科大学大学院医学研究科皮膚科学 教授
研究協力者 室田浩之 大阪大学大学院医学系研究科皮膚科学 准教授

研究要旨

本研究の目的は、アトピー性皮膚炎の診療に携わるさまざまな地域のさまざまな診療科の医師が使い、すべての年齢層の患者の診療に必要な内容や患者や家族などの臨床の場での意思決定の参考に資するために必要な内容を含むアトピー性皮膚炎診療ガイドラインを作成することにより、アトピー性皮膚炎の診療の均てん化に資することである。まず今年度は、アトピー性皮膚炎の診療における意思決定に重要な臨床課題を基に患者にとって重要なアウトカムを改善するために必要な問題を、クリニカルクエスチョン（CQ）として 24 課題を設定した。そしてその中の一つである「アトピー性皮膚炎の症状改善にシャワー浴は有用か？」という課題に対して、PubMed や医学中央雑誌などのデータベースを用いて、アトピー性皮膚炎の皮疹に対するシャワー浴の効果を検討した研究を検索し、エビデンスレベルの評価と統合で求められたエビデンス総体としてのエビデンスの強さと GRADE システムを参考にして推奨の強さを決定した。

その結果、「小児アトピー性皮膚炎の症状改善に学校内施設でのシャワー浴は有用である（推奨度 1、エビデンスレベル B）」と結論した。

A. 研究目的

アトピー性皮膚炎の診療を均てん化し、国内のすべての地域でより多くの患者が良質な医療を享受できるようにするためには、皮膚科医、小児科医、アレルギー科医、総合診療医等すべての医師や患者が活用できる診療ガイドラインを作成することが望まれる。

本研究では、アトピー性皮膚炎の診療において意思決定を要する臨床課題の中から「アトピー性皮膚炎の症状改善にシャワー浴は有用か？」という課題（クリニカルクエスチョン：CQ）について、臨床研究論文のシステマティックレビューを行い、推奨文を作成することで、診療の均てん化を視野に入れたアトピー性皮膚炎診療ガイドラインの作成に資することを

目的とする。

B. 研究方法

委員会で議論を重ね、アトピー性皮膚炎の診療における意思決定に重要な臨床課題を基に患者にとって重要なアウトカムを改善するために必要な問題をクリニカルクエスチョン（CQ）として、24 課題を設定した。我々は 24 課題の中の一つである「アトピー性皮膚炎の症状改善にシャワー浴は有用か？」という課題に対して、PubMed や医学中央雑誌などのデータベースを用いて臨床研究文献を検索したのち、システマティックレビューを行い、エビデンスレベルの評価と統合で求められたエビデンス総体としてのエビデンスの強さと推奨の強さ

を決定した。

アトピー性皮膚炎の治療における環境中のダニ抗原除去の有用性について、2013年12月以前の報告に関しては、日本皮膚科学会のアトピー性皮膚炎診療ガイドライン 2016年版の「アトピー性皮膚炎の症状改善にシャワー浴は有用か？」の構造化抄録を参考にし、2014年1月以降2016年2月までのものについては、海外論文はPubMed、国内論文は医学中央雑誌でデータベース化されている文献を検索した。

C. 研究結果

抽出された79件の論文のタイトル、要旨からCQに関連する3つの文献を参照した。医中誌では“皮膚炎-アトピー性 / TH or アトピー性皮膚炎/AL” OR “皮膚炎-アトピー性皮膚炎”の検索式でアトピー性皮膚炎 (#AD) ” シャワー/TH or シャワー/AL” OR “シャワー浴 /AL”の検索式でシャワー浴(#shower)に関するエビデンスを収集した。抽出された報告のうち1件がCQに該当したが、PUBMED検索と重複したため除外した。

最終的にアトピー性皮膚炎の小児を対象とした学校でのシャワー浴介入の効果検討に関する国内の3件の報告を抽出した。1件はオープン割り付けによる群間比較試験、2件は非群間比較介入試験であった前者はアトピー性皮膚炎のある小・中学生58名を、A群：全期間シャワー浴無し(15例)、B群：全期間シャワー浴(22例)、C1群：最初の2週間シャワー浴有り、最後の2週間シャワー浴なし(11例)、C2群：最初の2週間シャワー浴なし、最後の2週間シャワー浴有り(10例)、の4群に分け、開始時、2週間および4週間後の重症度推移を皮膚科専門医がSCORADにて評価した。その結果、B群とC1群のみで4週間後に統計学的有意な改善を認めた。C2群で有意な改善を認めなかった要因としてシャワー

浴の実施時期および期間中のアトピー性皮膚炎治療の影響を考察していた。非群間比較試験2件はいずれも小学生を対象とした小学校でのシャワー浴介入試験であった。一つは6週間のシャワー浴介入(n=53)の効果を小学校養護教諭による症状観察によって評価、他方は4週間のシャワー浴介入効果(n=11)を皮膚科医による重症度判定(Eczema Area and Severity Index:EASI)および肘窩における角層水分蒸散量、角層水分量、黄色ブドウ球菌のコロニー数の推移によって評価していた。いずれの報告においてもシャワー浴は介入期間中およびシャワー浴終了2週間後まで症状の有意な改善をもたらしていた。経皮水分蒸散量、角層水分量は介入前後で変化を認めなかったが、黄色ブドウ球菌コロニー数は4週間後と終了2週間後まで有意な減少を認めた。

D. 考察

アトピー性皮膚炎の小児を対象とした学校内での水道水によるシャワー浴介入試験3件の国内の報告があり、いずれもアトピー性皮膚炎症状を有意に改善した。汗の多い季節ほどその効果が得られやすいと考えられる。有害事象は報告がない。

E. 結論

以上より小児アトピー性皮膚炎に対する学校内施設での水道水シャワー浴は症状改善に有用である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

<論文発表>

1. Murota H, Katayama I, Exacerbating factors of itch in atopic dermatitis, Allergol Int, 66, 8-13, 2017.

<学会発表>

1. 室田浩之, アトピー性皮膚炎患者に発汗の是非をどう説明するか, 第116回日本皮膚科学会総会, 仙台, 2017, 日本皮膚科学会雑誌, 127, 931, 2017.
2. 室田浩之, 意外な汗の免疫機能とその制御, 第66回日本アレルギー学会学術大会,

東京, 2017.

- H. 知的財産権の出願・登録状況(予定も含む)
 1. 特許取得
なし
 2. 実用新案登録
なし
 3. その他